

W.B.イエイツのナショナリズムとナショナルアイデンティティ

氏名 佐伯 瑠璃子

1. 序論

19世紀、アイルランドではイングランドからの独立を目指しナショナリズムの機運が高まっていた。W.B.イエイツ(William Butler Yeats, 1865-1939)はノーベル賞を受賞したアイルランドの詩人、劇作家として世界で名高い。ナショナリストとしてアイルランド独立運動に参加した一人であったが、晩年モダニストへと変貌する。独立へと向けて大きく時代・国家・国民が変化していく中でイエイツはどのようにモダニストへと変化したのだろうか。グローバル化する社会におけるナショナリズムとアイデンティティの関連を見ることで、個人や国家のアイデンティティがどのように変化していったのか、その一端を見ることができる。外的要因によるナショナリズムを経て近代へと向かうアイルランドにおいて、いかに個人が変容を遂げたのか。イエイツの抱えるアイデンティティがいかに変化したか、社会構造・変化の側面から考察したい。グローバル化が進み、アイデンティティが曖昧となっているいま、自他においてその確立に奮闘してきたと考えられるイエイツを焦点にナショナリズムを読み解くことで、過去だけではなく、これからの社会の変容と自己のあり方を探ることができるのではないだろうか。時代は言うまでもなく流動的なものであり、その中で発生する文学や芸術は、政治・経済と同じ、社会や文化を作り上げる一つのパーツである。また、ナショナリズムなど近代化の中で築かれた基盤の上で、現在の私たちは暮らしている。これらの基盤が揺らぐことはすなわち、ナショナリズムの前提である国民や民族、そして各々が持つアイデンティティについて再び真っ向から向き合わなければいけないということ

である。今春のイギリス EU 離脱は、まさに EU というグローバリズムにおいて起こったナショナリズムの勝利であった。このようにナショナリズムを経てグローバル化に至る、この流れは繰り返され、連鎖していく。そのため、過去のような形態のナショナリズムを見直し、民族や国民といった集団のアイデンティティとの関連性、そしてそこに生きた人々の自己やアイデンティティを改めて見直すことは、今後のグローバル化に伴う変動の中で生きる我々にとって必要であると考えられる。

今回は紙幅の都合により、19世紀のアイルランドにおけるナショナリズムの背景と、イエイツのナショナリズム運動への共感と幻滅について述べる。そして、相互に作用しているナショナルアイデンティティとの関連性を中心に考察する。

2. W.B.イエイツとアイルランドの時代背景

イエイツはアイルランドで生まれたアイルランド人でありながら、必ずしも全てのアイルランド人に受け入れられてはいない。なぜならイエイツはアングロサクソン系プロテスタントのアングロ・アイリッシュであり、ゲーリック・アイリッシュと呼ばれる土着のケルト系ローマ・カトリックの人々からは区別される存在であった。この関係を把握するため、イングランドとの関わりを中心にアイルランドの歴史を見ていく。

(1) イエイツ以前のアイルランド

5世紀、ケルトの文化と独自の宗教を持つアイルランドに聖パトリックが来島し、キリスト

教が持ち込まれた。以来、敬虔なカトリック教国であったアイルランドであったが、内乱状態であった12世紀、アイルランドにノルマン人が侵攻し、瞬間にアイルランドの首都ダブリンがあるレンスター州を制圧した。ノルマン人が隣国に強力な王国を築き対抗勢力となることを恐れ、イングランド王であったヘンリー2世は強大な戦力でアイルランドへ攻め入った。これに対してノルマン人はレンスター州全土を献上し、アイルランドはイングランドの支配するところとなった。その後イングランドからの入植が進み、イングランドの貴族階級がアイルランドの土地を支配した。しかし、彼らは入植し支配する一方で法整備を行い、内乱が続いたアイルランドに平和と秩序をもたらした。そのため彼らの一部はアイルランド人たちに受け入れられた。植民者でありながらアイルランド文学者の保護やアイルランド語の習得を行う者もあり、アイルランド人と結婚した例も多くあった。また、イングランド王の代理であるアイルランド総督はアイルランドに住む貴族から任命されていたため、イングランド王はアイルランドにおいて統治の実権を持っていなかった。そのため、入植したイングランド人のアイルランド化が進み、この状況を危惧したイングランドが、アイルランド貴族とゲーリック・アイリッシュを隔離する政策を打ち出したが、効力を発することなく、入植した貴族たちのアイルランド人との同化は進んでいった。15世紀にはアイルランド貴族の一部でもイングランドからの独立を求める声が増えた。これに対し、ヘンリー8世は1541年に自らアイルランド王に就任することを宣言し、アイルランドを完全にイングランドの支配下に置いた。アイルランドからアイルランド的なものを全て排除しようと、イングランド化を強行に推し進めた。そして宗教改革により、英国はプロテスタント教国となった。それに伴い、アイルランドに住む貴族らもプロテスタント教徒¹となり、その家系がアングロ・

¹ 宗教改革以前の入植者したアングロサクソン系ローマカ

アイリッシュと呼ばれるようになった。17世紀にオリバー・クロムウェル² (Oliver Cromwell 1599-1658)がアイルランド支配を強化するにあたり、アイルランド全人口に対して新教であるプロテスタントへの改宗を強要し、カトリック教徒への弾圧を強めた。18世紀初頭にはプロテスタントの優位を脅かさないよう、遺産相続や借地権などに差別的な法制度が確立され、カトリック教徒たちは土地を失い、富と権力を掌握するのはプロテスタント教徒へと移行した。そのため、カトリック教徒たちは貧困の時代を生きることとなった。イングランドの支配と弾圧から逃れようと20世紀に至るまで、アイルランドとイングランドの間で断続的に戦いが起こることとなった。1791年、英仏戦争をきっかけとしてイングランドからの決別と独立を目的としたユナイテッド・アイリッシュメン協会³が結成された。アイルランド各地で武力闘争を頻発させたが、同時に文化的な面の復興運動も行った。ユナイテッド・アイリッシュメンはその名の通り、宗派に影響されず、アイルランドに住む全ての人々の統一を政治の方針として掲げた。そして、このユナイテッド・アイリッシュメンによるナショナリズム運動にはプロテスタントの知識人たちが指導者の役割を果たしていた。⁴ここに1922年アイルランド自由国設立

トリックの人々がオールドイングリッシュ、宗教改革以後に入植したアングロサクソン系プロテスタントの人々がアングロ・アイリッシュである。(Connolly,1995:114-143)
²ピューリタン革命の指導者。アイルランドにおける反政府勢力の殲滅及び、全人口の新教徒(プロテスタント)への改宗という統治方針により、イングランドの統治を徹底して行った。(波多野 1998:122)

³ 1791年に現北アイルランドのベルファストで結成。宗派を超えたアイルランド人の団結、カトリック教徒の解放とアイルランド議会の改革を目指した。政治的なナショナリズム運動を行った民族主義的組織。

⁴ イングランドで英国国教会が台頭したことにより、アイルランドにおいては、国教会派プロテスタント、プロスピテリアン派プロテスタント(非国教会派)、カトリックの3つの宗派が存在した。それまで支配者層でありアイルランド議会やその他公共の機関に属していたプロスピテリアン派プロテスタントたちは排除され、それらの政治に関わる面は全て国教会派により独占された。そのため、非国教会派のプロテスタントたちがナショナリズム運動に参加した。(波多野 1998:136)

へ向かうアイルランドのナショナリズムが萌芽をみる。

このように宗派を超えてナショナリズムが活発化する中、イングランドではアイルランド問題の早期解決が掲げられ、カトリックを圧倒的少数派としその脅威を排除するため、1800年の英・アイ条約締結により、アイルランドを連合国とした。ナショナリストたちの反対を押し切り、アイルランド議会はイングランド議会に併合されたのだ。また、1845年には大飢饉が発生したことにより、飢饉により死亡者と国外脱出者が増加し、人口は半分以下に激減した。この危機的状況と、飢饉に対するイングランドの対応に、ナショナリストたちはアイルランド自治法の必要性をより強く議会に訴え続けた。19世紀後半にかけて、合法的な手段では埒があかないとして、ナショナリスト急進派が暴力的手段により抵抗するようになる。1847年には青年アイルランド党⁵が結成され、併合法撤廃運動の中心を担った。また1858年にはIRB(Irish Republic Brotherhood)⁶が設立され、イングランドの支配、宗教弾圧に対して武力により独立運動を行うという非法手段による過激な行為を激化させ、アイルランドにおけるナショナリズムは暴力的な面を強く持つようになった。

(2) イェイツという人物

ー ナショナリズムへの共感

イングランド支配から逃れようとするナショナリストたちによる過激な活動が活発化する中、イェイツは1865年アイルランドの首都ダブリ

ンで生まれた。アイルランド詩人・劇作家として広く名を知られているが、彼もまたプロテスタントでイングランド系のアイルランド貴族の家系に生まれたアングロ・アイリッシュであった。画家であった父親はキルデア州出身の貴族の血を受けついでおり、曾祖父はアイルランド最大である国教会系プロテスタントの教会、the Church of Ireland(アイルランド国教会)の牧師であった。また、母親はスライゴ州出身の裕福な商人の家系であった。1867年には父と共にロンドンに転居するが、1880年父の都合により再びダブリンに戻る。イェイツは美術学校に入学して画家を志すが、在学中に画家ではなく詩人としての道を志した。1885年、ジョン・オリアリー(John O'Leary, 1830-1907)との出会いが、イェイツをナショナリズムへと導いた。オリアリーはIRBの指導者の一人であり、急進的な独立運動を行っていた。オリアリーと、共に活動する人々はトーマス・デイヴィス(Thomas Davis, 1814-45)⁷の民族意識の持ち方を容認していた。デイヴィスは、アイルランドはあくまでアイルランド的であることを目指すべきで、イングランドの要素は排除すべきだと主張した。一方、いかなる祖先を持っていたとしても、国を愛し仕えるなら、みんなアイルランド人であるとも述べ、アイルランド人の定義をアイルランドに住む全ての国民に広げたのである。(堀越1987:76-77)アングロ・アイリッシュであっても、アイルランドに愛国心を持つものはアイルランド人である、というこの考えはアイルランドの独立運動に大きな影響を与えた。このデイヴィスの理念に影響を受けていたオリアリーとイェイツの出会いは、イェイツ自身がアイルランド愛国主義者であることを自覚させ、ナショナリズム運動へと駆り立てたのである。

アイルランドへの愛国心を再認し、描くべき主題を見出したイェイツは、詩人として本格的

⁵ 1842年に併合法撤回運動を推進するトーマス・デイヴィス(Thomas Davis, 1814-45)らの指導により発足。宗教を超え、アイルランドに住む人々の民族精神を高揚させるため、ケルトの歴史や文学の研究、アイルランド語復興などを行い、雑誌「ザ・ネイション」によりその運動を広めた。

⁶ フェニアン(アイルランド共和主義団)による運動の革命的中核として設立された秘密結社。後にアイルランド系アメリカ人の支援を受けてアイルランド義勇軍となり、IRA(アイルランド共和軍)の母体となった。(波多野1998:176)

⁷ 青年アイルランド党(the Young Ireland)の幹部であり、アングロ・アイリッシュであったが、カトリック解放とアイルランドの独立運動を支援する雑誌「ザ・ネイション」の主筆であった。

に活動を開始し、詩を通して国民のケルト精神の再構を試みた。1887年に再び家族とともにロンドンに移るが、幼少期から頻りに訪れていた母の実家、アイルランドのスライゴーには、ロンドン在中にもしばしば訪れた。スライゴーはアイルランドの民話が口承伝授により多く語り継がれている地域であった。イエイツにとってスライゴーは、大都会ロンドンや支配下として

混沌としているダブリンと比較すると、自然豊かで長閑な心の故郷であり、詩人としての想像力を刺激され、幻想的なアイルランド性を自身の作品に取り込んでいった。それは初期の作品のうち最も有名な詩の一つである *The Lake Isle of Innisfree* に表れている。

The Lake Isle of Innisfree

I will arise and go now, and go to Innisfree,
And a small cabin build there, of clay and wattles made;
Nine bean-rows will I have there, a hive for the honey-bee,
And live alone in the bee-loud glade.

And I shall have some peace there, for peace comes dropping slow,
Dropping from the veils of the morning to where the cricket sings;
There midnight's all a glimmer, and noon a purple glow,
And evening full of the linnet's wings.

I will arise and go now, for always night and day
I hear lake water lapping with low sounds by the shore;
While I stand on the roadway, or on the pavements grey,
I hear it in the deep heart's core.

(The Collected Poems of W.B. Yeats 1989)

実在するスライゴーのギル湖に浮かぶ島である *Innisfree* がイエイツの心の支えとなっていることが読み取れる。このように、初期の詩からは地位や宗教に囚われないアイルランド人としての故郷への思い、そして愛国心が多く反映された。また、アイルランドの民話や神話といったフォークロアを収集した *Fairy and Folk tales of Irish Peasantry* (『アイルランド農民に伝わる妖精物語と民話』1888) や、神話を軸とした *The Wanderings of Oisín and Other*

poems (『アシーンの放浪⁸とその他の詩』1889) を出版し、詩人としての地位を確立した。神話や民話を題材とし、そこに自らの愛国心を投影した物語や詩を描くことで、ケルト精神の復興に力を注ぎ、アイルランド人の誇りを同じ愛国

⁸ ケルト神話伝説上の人物アシーンの物語。国の勇者であり優れた詩人であり、妖精ニアブとともに旅にして楽園にたどり着く。そこで300年間夢のような暮らしを送るが、アシーンが帰郷を望む。ニアブはそれを許可するが、「決して馬から降りてはいけない」と忠告した。しかし、それを守らなかったアシーンは、大地に降りた途端、300歳の老人となってしまふ。

者たちに伝えようと試みた。また、J.M.シング
(John Millington Synge, 1871-1909)⁹ やグレ
ゴリー夫人(Lady Isabella Augusta Gregory,
1852-1932)¹⁰らと共に、詩だけではなく、実践
的な演劇運動を開始した。1899年にはアイルラ
ンド文芸座(The Irish Literary Theatre)を創
設し、更なる活動を目指して、1904年には現在
のアイルランド国立劇場として知られるアベイ
座(The Abbey Theater)を創設した。演劇活動
を通してケルト文化による国民の統一を国民に
直接投げかけた。

このようにして、イエイツを中心にアイルラ
ンド文芸復興運動が起こり、ケルトの民話、神
話、そして神話の中の英雄を詩、そして舞台へ
と乗せた。アイルランド国民にルーツである誇
り高きケルト文化を再認識させることにより、
アイルランド独自の国民文学を再構し、国民を
統一に導くべくナショナリストとして積極的
に啓蒙活動を行った。

3. ナショナリズムとイエイツのアイデンティティ

(1) ナショナリズムへの幻滅

文芸復興というかたちでナショナリストとし
て独立運動を行ったイエイツであるが、そのナ
ショナリズムへの限界を見ることになる。ナ
ショナリズムは多様な現象であり、それが発生
する国や地域、政治状況下において様々に異な
る。また、塩川(2008)はナショナリズムを4つ
の類型に分類しており、アイルランドのナシ
ョナリズムに当てはまる類型は、次のものである。

⁹ アングロ・アイリッシュの詩人・劇作家・小説家。
「ゲール語同盟」の影響でアイルランド語やアイルラ
ンド英語にも関心が高い人物であった。アイルランド英語
を駆使した公園は好評を博し、1908年にはアベイ座の
支配人となった。(風呂本[編]2009,河野:198)

¹⁰ アングロ・アイリッシュの詩人・劇作家。イエイツ
と共同でアイルランドのフォークロア収集にも当たっ
た。イエイツの演劇活動を金銭面でも支援した。

ある民族の居住地が他の民族を中心と
する大きな国家の一部に包摂され、少数
派と成っている場合。これまで属してい
た国家から分裂して独立国家をもとうと
するか、あるいはその国家の中で政治的
自治を獲得しようとする運動。(塩川
2008:23)

アイルランドにおいては、「民族」の捉え方の
違いにより、ナショナリズムは以下の2つの形
態が存在した。

[1] ゲーリック・アイリッシュを中心にした宗
教と歴史を共有するゲーリック・アイリッシュ
らが、団結し独立を目指す。

[2] イエイツのようなアングロ・アイリッシュ
も参加した、宗教や歴史を超えアイルランド国
民としての一貫性を作り上げ、独立を目指す。
社会人類学者であるゲルナー(Ernest Gellner
1925-1995)はナショナリズムの定義とそこにあ
る感情について以下のように述べている。

ナショナリズムとは第一義的には、政治
的な単位 the political unit と民族的な
単位 the national unit とが一致しなけ
ればならないと主張する一つの政治的
原理である。感情としての、あるいは運
動としてのナショナリズムは、この原理
によって最も適切に定義することがで
きる。ナショナリズムの感情とは、この
原理を侵害されることによって喚び起
こされる怒りの気持ちであり、また、こ
の原理が実現された時に生じる満ち足
りた気分である。ナショナリズムの運動
とは、この種の感情によって動機付けら
れたものにほかならない。(ゲルナー
2000:1 (Gellner 1983:1))

[1][2]のいずれにおいても民族とその民族の上
にある政治が一致するという原理が侵害されて
いる。[1]においてはイングランドの政治、民族、

宗教単位が、[2]においては政治、民族の単位が一致せず、アイルランドに住む人々に「怒りの気持ち」が沸き起こり、ナショナリズムへと発展したといえる。

イエイツはフォークロアを材料に、ケルトの文化と歴史を改めて作り上げ、それをアイルランドの誇りとして発信することでナショナリズム運動を行った。アイルランド国民の基軸としてケルトの文化や歴史を再構し、神話化された歴史をナショナリズム推進の糧とすることは、アイルランドで生まれ育ったにもかかわらず、アングロ・アイリッシュのプロテスタント家系であったイエイツにとってのアイデンティティの模索であったとも考えられる。そしてその模索こそが、イエイツが「アイルランド人」であるというアイデンティティを確かなものにしたのであろう。ゲーリック・アイリッシュの人々と同じ一人の愛国者として、怒りの気持ちを共有できたのである。これがイエイツにとってのナショナリズムだったのではないだろうか。

しかし、同じ国で起こった民族意識の相違による2つのナショナリズムは、互いに衝突を避けることはできず、まさにイエイツはアングロ・アイリッシュとしてゲーリック・アイリッシュからの批判を受けることとなる。イエイツの元にはアングロ・アイリッシュであり同じ志を持つJ.M.シング、グレゴリーらが集まり、共にアングロ・アイリッシュのアイデンティティを模索しながら、ナショナリズム運動を行った。共に設立した劇場で、ケルトのフォークロアを元にした演劇を数多く公演した。ナショナリスティックな作品は観客にも大いに受け入れられた。しかし、一方でアイルランドの庶民の生活の現実を描いた作品に、観客は反感を露わにした。その原因は、カトリックの観客らによる過剰とも言える反応だけではなく、イエイツらの持つ知識層としてのアングロ・アイリッシュの誇りが劇中に垣間見えたからであろう。アイルランド人としてアイルランドのナショナリズム運動に積極的に関与し、アングロ・アイリッシュ

として文芸復興運動を先導した。しかし図らずともそれがイエイツをナショナリズムへの幻滅へと導いたのである。1892年、イエイツの戯曲 *The Countess Cathleen* (『キャスリーン伯爵夫人』)の初演では、飢饉に苦しむ農民を救うため、伯爵夫人がイングランド商人に魂を売ると言うストーリーに、観客は怒りをあらわにした。観客は、アイルランド農民の無知と、理想化された地主のアングロ・アイリッシュが描かれていると受け取ったのだ。そしてそれは作者の貴族意識の表れであると怒りをあらわにした。また、1907年、シングによる戯曲 *The Playboy of Western World* (『西の国のプレイボーイ』)がされた初日に暴動が起こった。父親を殺害した男に、アイルランドの田舎娘が恋をするという部分に、アイルランド国民の侮辱であり、道徳的概念を汚しているとして、聴衆から大きな非難を受けた。観客は上演中にも妨害を行い、新聞にも上演中止の勧告が出された。しかし、当時アベイ座の支配人であったイエイツは、公演を中止することなく予定の上演日程を終えたが、最終上演日には警官が出動して劇場を取り囲むといった騒動になった。この戯曲について議論の場を持つために劇場で集会を開いたのだが、イエイツは民衆に受け入れられず、アングロ・アイリッシュと、ゲーリック・アイリッシュとの埋められない宗教と地位の溝、そして芸術文化としての演劇に対する民衆の無理解を目の当たりにしたのだ。イエイツは、市民は保守的で教養が無いと嘆き、また芸術の自由を主張した。これまでの観客の理解への期待が失望へと変わり、これまでの自己と決別する様子が詩集『*Responsibility*』に収められている。そこに所収されている *A Coat* からは以後の詩にも影響するイエイツの強い意志が見られる。

A Coat

I made my song a coat
Covered with embroideries
Out of old mythologies

From heel to throat;
But the fools caught it,
Wore it in the world's eyes
As thought they'd wrought it.
Song, let them take it
For there's more enterprise
In walking naked.

(The Collected Poems of W.B. Yeats 1989)

これまで同じアイルランド人として団結を呼びかけていた民衆のことを'fools'とよび、自身は裸で歩いてゆく、つまり、これまでの自己を脱ぎ捨てていく決断を示している。その後、アイルランドのナショナリストたちを冷淡な目で見るようになり、現実的な視点から物事を捉え、会話的、直接的な詩体へと変化していく。ナショナリストとしての運動からは退き、劇場では日本の能を取り入れた作品を公演するなど、モダニストとしての一面を見せるようになる。そしてナショナリストではなく、より一層、文学者としての道を進むこととなった。しかし、生涯にわたってアイルランドへの愛国心を捨てることは無かった。

(2) ナショナルアイデンティティの揺らぎ

イエイツのナショナリズムへの共感と幻滅の過程から、イエイツの中にあるアイデンティティは、詩や活動の変化にも表れているように大きく変化した。アイデンティティとは、社会的役割を他者の承認により与えられ、それにふさわしい「私」を演じることで得られるものである。イエイツは他者(イエイツの詩や演劇に共感する人々)によりアイルランド人としてのアイデンティティを確立し、そして他者(劇中に暴動を起こした人々)によりアイルランド人としてのアイデンティティが脅かされた。このような、国民や民族としての自己意識であるアイデンティティは、一般的にナショナルアイ

デンティティと呼ばれる。イエイツのナショナルアイデンティティとナショナリズム運動の関連性から、ナショナリズムへの幻滅に至ったプロセスを考察してゆく。

アイルランドにおけるナショナリズムは先に述べたように2つの系統があったが、いずれも怒りの気持ちを共有し、民族・国民という各々の集団の単位でアイデンティティを統一し、それを基軸にその集団の意識を高め、独立に向けて運動を進めていった。ナショナリズムについて述べる中で「集団」ということばを使用するとき、それはエスニシティ(民族)を指す場合もあり、またネイション(国民)を指す場合もある。¹¹つまり、ナショナルアイデンティティは、集団的アイデンティティの一形態として使用されることが多いが、この「ナショナル」についてエスニシティ、ネイションのいずれを当てはめるかによって、その意味合いは異なる。アイルランドからイングランドを排除し取り戻す、というゲーリック・アイリッシュにとってのナショナリズムの場合、この「集団」はA. スミスの言う「エトニ」というエスニック共同体に当てはまる。「エトニ」とは、「共通の名前・血統・神話・歴史・文化・領土、これらへの結びつきをもつような人口カテゴリー」であり、「確固としたアイデンティティと連帯感をもつ共同体」である。(アントニー・D・スミス 1999:37)そのアイデンティティは共通の要素への愛着と集団への帰属感から構成される。(中谷 2003) イエイツはアイルランド人のナショナルアイデンティティの統一を試みたが、そこにはイエイツ自身が理想としたネイションのアイデンティティが掲げられていた。しかし、ゲーリック・アイリッシュたちはエスニック共同体のアイデンティティを常に掲げていた。イ

¹¹ 英国は現北アイルランド・イングランド・ウェールズ・スコットランドという複数のネイションがあり、ネイションには日本語の民族というに近い意味を持つ。(塩川 2012:15)本稿ではケルト民族の血を引く人々をエスニシティ、民族を超えたアイルランド国民としての集団をネイションとし、以後使用する。

エイツのナショナリズムの理念と運動に共感していたゲーリック・アイリッシュは多く存在した。一方で、その共感の根底には異なったエスニック共同体が存在したことにより、アイデンティティの統一には結びつかず、エイツは演劇運動によるナショナリズム運動から身を引いた。

また、集団的アイデンティティとナショナリズムについて、社会学者 A.ギデンズはその密接な関係性を述べている。「ナショナリズムは、たんに集団的アイデンティティの基盤を提供するだけでなく、こうした集団的アイデンティティが際立った、貴重な達成の結果であることを証明する脈絡の中で、集団的アイデンティティの基盤を提供している。ナショナリズムは、比較的新しい類型の原理であると言えるが、過去の中にしっかり投錨されたアイデンティティを得たいという願望に訴えかけていく」(A・ギデンズ 1999:247-8)集団をエスニック共同体として捉えるとき、その共同体が持つアイデンティティはナショナリズムの基盤となり、その基盤を持つことで、自分を帰属社会に位置づけることが可能となる。ゲーリック・アイリッシュの視点から見たとき、ケルトの歴史を持つ土着のアイランド人でカトリックである者は、同じ文化・宗教と被支配という歴史を持つ共同体であり、それらによって彼らのアイデンティティの基盤は容易に作り上げることができる。そして、被支配者という立場からの解放を目指す運動により、その基盤はより強固なものとなる。しかし、この場合、アングロ・アイリッシュはこの集団の外に置かれることになる。

一方で、文学者として、アングロ・アイリッシュであることに誇りを持っていたエイツは、共にゲーリック・アイリッシュ集団の外に置かれており、同じエスニシティと誇りを持つアングロ・アイリッシュの J.M.シングらと文芸復興運動を行った。このナショナリズムは、アングロ・アイリッシュのナショナルアイデンティティの基盤を作りあげたのである。つまり、ゲー

リック・アイリッシュたちが踏み入れることの出来ない基盤を囚らずともそこに築いていたのである。エイツらは文芸復興運動を通してケルトの歴史や文化を宗教や階級の垣根を越えて「アイランド人」としてのナショナルアイデンティティを確固たるものにしようとしたが、それらの基盤の違いを超えて結ばれることはなかった。文芸復興運動、特に演劇運動によってその相違が明らかとなり、エイツの理想とした「アイランド人」としてのナショナルアイデンティティが崩壊し、そしてナショナリズム運動の基盤すら異なっていることが露わになり、ナショナリズムの幻滅へと繋がったのではないかと考える。

このように、エスニック集団ごとの根底にあるナショナルアイデンティティの概念の違いと、ナショナリズムとアイデンティティの関連性を見ることにより、ナショナリズムの基盤となるエスニック共同体の違いが、エイツのナショナリズムの幻滅に多大な影響を与えていることがわかった。エイツはアイランドに生まれ、愛国心を持ち独立運動に参加したところで、その階級や宗教の差を埋めることはできなかった。アイランド人でありながら、アイランド人になりきることができず、その模索を積極的に行うも、自身の中で確固たるナショナルアイデンティティを形成することができなかった。それは、エイツの詩体の変化や、ナショナリズムを通して一体感を求めたゲーリック・アイリッシュの人々を批判することばに見て取れる。ナショナリズム運動から身を引いた後は、文学者としてダブリンとロンドンを往復し活動を続けるが、彼は生涯アイランド人であり続けた。エイツ自身のナショナルアイデンティティが、アイランド人とアングロ・アイリッシュとの間で常に大きく揺らいでおり、それは帰属する社会において明白な基盤を持っていなかったからであろう。しかし、単に支配や被支配といった歴史の関係性からだけではな

く、イエイツのナショナリズムへの関わりと、その失敗を社会構造の側面から見ていく。

A. ギデンズは近代について、社会生活は基本的に再帰的(recursive)なものであり、社会的場面でなされる行為と結果は、常に相互に影響しあうものであるとし、行為産出の媒介、そして行為が産出する結果という二重性を持った構造と行為は相互依存的な関係であると述べている。ここでの「構造」は人と人との心的相互関係では無く、社会の「規則と資源」を指している。(Giddens, 1984:25)つまり、イエイツについて次のような見方ができる。アイルランドに生まれ、アイルランドを愛し、愛国心を持ち独立運動に携わる、という行為を通して、ナショナリストとしてイエイツは構成されている。しかし、このナショナリストという立場を構造的にみると、帰属する国やエスニシティ、民族意識、ナショナリズムの方向性といった「規則や資源」により構成されている。これらの資源の多くはゲーリック・アイリッシュの人々が歴史的に敵対してきたものである。イエイツやJ.M.シングの描く戯曲の中にゲーリック・アイリッシュの人々がアイルランド人に対する侮辱を見出した時、アングロ・アイリッシュであるイエイツやシングがいかにか説得を試みてもそれは観客に届かなくて当然であった。何故なら規則や資源による構造の違いが顕著である場合、それは心的相互行為に還元することが出来ないのである。そうしてイエイツはナショナリストとしてアイルランドへの再帰を失った、つまりアイルランド人でありながら、ナショナリズムが激化するアイルランド社会へ再帰出来ないという状況に陥ったのである。しかし、生涯をアイルランド人として生きたイエイツは、自身が詩の技法として用いた「仮面」理論により、アイルランド人として生きる手法を得たと考える。イエイツは自身の詩の技法として、「仮面」という理論を挙げている。求める対象を描く時にはその対極に立ち、その対極からのズレに着目し再び対象へと接近するという手法であった。欲や自分が抱

く理想の姿と反対の極にある「仮面」をかぶり、詩を描いたのだ。イエイツの詩が転換期を迎えるまでは、死による自己の美化など若きイエイツの欲望を律する「矯正ギブスの」役割を果たしていた。(木原誠 2014) この理論はイエイツのアイデンティティにおいても作用していると考えられる。ナショナリストとしてのイエイツにとって、美しいフォークロアの世界の描写は、その仮面の裏に自分が到底得ることができないケルトの歴史・血統・文化を欲するイエイツの思いがあったのではないだろうか。アイルランド人でありながらゲーリック・アイリッシュと対極にある自分に「仮面」をつけ、ナショナリズムに貢献するアイルランド人として、文芸復興に力を注いだのだ。しかし、アベイ座での暴動によりその「仮面」が壊れたイエイツは、やはりアイルランドのナショナリストとしてアイルランド社会に再帰することは難しかったと言えよう。先にも述べたようにイエイツの詩はその後アイルランドの現実を直接的な表現で描いてくようになるが、現実を描く新たな詩人という「仮面」の裏に、幻想的なアイルランドへの愛着を持ち続けながら、帰属する社会での役割を演じ、アイルランドの詩人、戯曲家としての道を歩み続けたのではないだろうか。

4. 最後に

イエイツは国家のナショナリズムに文芸復興運動というかたちで貢献したが、それは自身のナショナルアイデンティティの探求という色合いが強かった。またエスニック共同体が異なる場合、アイルランドに生まれ、アイルランドで独立運動を行っていても、歴史・文化・地位・宗教・エスニシティが異なり、且つマイノリティであるエスニック集団に属するイエイツは、アイルランド国民としての確固たるナショナルアイデンティティという基盤を得ることが出来ず、ナショナリズムの中で常に揺らぎ、「仮面」をかぶることによって、自身のアイデンティティ

を保った。暴動を起こした観客への幻滅だけではなく、自身のナショナルアイデンティティが脅かされたことが、ナショナリズムから身を引くきっかけとなったのだ。つまり、ナショナリズムは必ずしも同じ集団の人々が持つネイションやエスニックの意識を前提とし、その団結から独立を目指すことがすべての根拠ではない。マイノリティであるエスニックに属する人々のアイデンティティの模索も、ナショナリズムの一つの根拠ともなりうるのである。

参考文献

1. Gellner, Ernest,(1983), *Nations and Nationalism*, Blackwell, London. (ゲルナー・アーネスト. 加藤節 他訳(2000) 『民族とナショナリズム』 岩波書店)
2. Giddens, A. (1985), *The Nation-state and Violence*, Polity Press.(アンソニー・ギデンズ. 松尾・小幡訳(1999) 『国民国家と暴力』 而立書房)
3. A.Smith, A.D.(1986), *The Ethnic Origins of Nations*, Basil Blackwell, Oxford.(アントニー・スミス. 高城・巢山訳(1999) 『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会)
4. 木原 誠 (2014) 「W.B.イエイツによる『仮面』と老い」 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』 第19巻(1)
5. 中谷猛(2000) 「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理-国民国家論研究のためのノート-」 『立命館法學』2000年、立命館大学法学会
6. 波多野裕造(1998) 『物語アイルランドの歴史 欧州連合に賭ける“妖精の国”』 中公新書
7. 風呂本武敏 編(2009) 『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』 世界思想者
8. 堀越智(1987) 『アイルランド民族運動の歴史』 三省堂
9. 吉田文美(1995) 『アイルランド人になりそこなったイエイツ』 徳島大学言語文化研究
10. William H. O'Donnell & Douglas N. Archibald. eds. (1999) *The Collected Works of W. B. Yeats Vol. III. Autobiographies*, New York: Scribner.
11. Finneran, Richard J. ed. (1996) *The Collected Poems of W.B. Yeats-rev.2nd ed.* New York: Scribner.
12. Anthony Giddens.(1984) *The Constitution of Society*. Polity Press.